書　評・紹　介

知念　渉（編）

『東京で育つ／育てる――母子の生活史と不平等の布置』

有斐閣，2025年11月，364ページ

本書は現代の東京を生きる子育て家庭の生活史である．ある自治体「城東区」のもと実施された質問紙調査と，そのうち24組の母親と高校生の子どもそれぞれのインタビューで構成されている．子育て研究としては比較的子どもの年齢が高い時期に注目し，調査対象者の語りと量的分析による図解の組み合わせで，家族内の葛藤や苦悩を分析していく．

本書の特徴として，インタビューを受けたそれぞれの親子が，社会空間を示す１枚の座標上に配置される点が挙げられる．社会空間とは，ブルデューの階級分析で用いられる概念であり，資本の保有量や構成などを軸に構築される．まず，質問紙調査データの多重対応分析により社会空間を構築し，そのなかに各親子を位置づける．すると，それぞれが置かれた位置によって，世帯収入や相談できるネットワークの状況といった社会的条件の差異が可視化される．さらに本書では，小熊英二の『日本社会のしくみ』の三類型を手がかりに，大卒で比較的賃金の高い「大企業型」，家や土地の相続が可能で豊かな地域のつながりをもつ「地元型」，それらの強みのない「残余型」として各家族を３つに分類する．そのうえで，これまでの親子の軌跡を辿るインタビューが収録され，母親と「城東区」との縁，家族の状況，次に子どもからみた家族や学校生活などについて，当事者の厚みのある語りと社会空間の俯瞰的な視点を往復しつつ，暮らしぶりが分析されている．社会空間上の位置からは親子のライフスタイルや教育方針も推測されるが，インタビュー協力者は実際にそれらを有しており，著者らはブルデューの研究方法の有効性を実感したという．

本書は小熊の三類型を用いることで，これまであまり着目されてこなかった「地元型」の暮らしぶりを詳細に描き出した．経済資本に，世帯収入だけではなく不動産の相続も考慮したことでその存在が注目された「地元型」は，父親に自営業が，母親に正規労働者が比較的多く，比較的安定した暮らしを営んでいる．この三類型を用いたことで，大学進学費用や準備など，家庭の資源の差が顕在化しやすいとされる子どもの進路選択についても，教育社会学の社会階層を中心としたこれまでの視点とは異なる議論が展開される．「大企業型」は「自明化された大学進学」，「残余型」は「日常生活の維持」，「地元型」は「つながりのなかでの成熟」というラベル付けがなされており，「地元型」の子どもの進路選択は教育をめぐる競争から距離を置きつつ，地元のつながりのなかで先に想定された具体的な職業名を目指して，行ける学校に行くという流れがあるという．「残余型」とは異なる「地元型」の精緻化は，今後の子育て研究に重要な示唆を含んでいるだろう．

著者が述べるように，社会の構想・設計していくためには，人々の選択の背景にある社会的条件，互いの状況への理解が不可欠である．実生活ではなかなかその機会が乏しいなかで，若手研究者を中心とした９名の執筆による本書は，現代の東京の暮らしをリアルに描いた密度の高い一冊と言えるだろう．

（戸髙南帆／東京大学社会科学研究所）